

人気観光スポット「大通公園」のコンセプト、ビジョンを明確に

東日本大震災以来、被災地の一刻も早い復旧、復興が望まれているが、一方、地方都市の防災、安全対策と共に地方の活性化、まちづくりのあり方が課題となっている。

札幌市は、1869年(明治2年)の開拓使設置から140年を経過した観光都市だが、札幌市内都心部で一番の人気観光スポットであり、一番の市民の憩いの場である「大通公園」が今年で100周年を迎えた。それを機に今、大通公園のあり方が問われている。車社会、少子高齢化社会、環境問題、観光のグローバル化などという時代の変遷のなかで大通公園は将来、どうあるべきなのか。また、札幌の都市構想のなかでどう位置づけたら良いのか。将来像、コンセプト、ビジョン、問題点などを探る。

1881年に「大通」と命名、1909年に逍遙地に

大通公園は西1丁目から12丁目に広がる幅約65m、全長1.5キロ、面積約7万9千平方メートルの公園。その歴史は1871(明治4)年、北海道開拓使などが置かれていた北側の官庁街と南側の商店街・住宅地の間に火災防止(火防線)として設けられた幅105メートルの道路が始まり。81年に「大通」と名付けられて、1909年に札幌区(当時)が3~7丁目で公園の本格的整備を始め、11年に「大通逍遙地(しょうようち)」として完成した。1950年から5年計画で芝生と花壇がある公園になり、1957年に完成したテレビ塔とともに観光のスポットに躍進した。

大通公園は『札幌の父なる公園』、公園を東西に延長が理想

1. 大通公園のコンセプト、ビジョンを明確にせよ。

大通公園のコンセプトは「市民の憩いの場」としてまた、観光の視点から「札幌の顔」としての位置づけであると思うがそれを明確にすべきだ。

キャッチフレーズは「札幌には大通公園という(憩いの場の)笑顔がある、(観光スポットとしての)宝がある」と考えてみた。また、「豊平川は札幌の母なる川」であるが、それに対比して「大通公園は札幌の父なる公園」(憩いの場で人の再生産の場であるから)という考えはどうか。

(1)市民の憩いの場に

今の大通公園のあり方、使い方に問題点が数々ある。まず、大通公園(1丁目~12丁目)がイベント会場化し、商業主義過ぎないか。昨年は大小合わせて49件の催事が、準備や撤収も含めた使用日数は最多の6丁目が274日で年間の75%も占めたという。これでは市民や観光客が憩いや記念に訪れても催事で占領されて足を運ぶことが出来なくなるだろう。道産品や食のPR、YOSAKOIそーらん祭などの催事は他の場所に変えてはどうか。それらの衛生面(飲食店の舞台裏、段ボール箱など)、美観イメージ、騒音、違法駐輪などが問題だ。ただし、名物の「とうきびワゴン」は良いと思う。なぜなら、季節の香、味を楽しめる唯一の「札幌の風流さ」があるからだ。次に、シルバー層、子供、観光客にもっとやさしい場所にしなければならない。木々の緑や色とりどりの花、噴水、遊具、ベンチ、トイレなど憩いの場としての環境、設備を年々、進化、充実させなければ永続的に人気、支持を得られない。

(2)観光都市札幌の名物スポットに

観光は東南アジアからを始めグローバル化となっている。まず言語の問題だ。公園内に英語、中国語、韓国語などに対応した「国際交流案内スポット」を設置し、外国人が安心して立ち寄って観光を楽しめるよう配慮すべきだ。空港、札幌駅構内にも設置が必要だろう。それが国際都市の条件だ。また、単に、「大通公園」といっても抽象的だ。公園内に目玉となる何かがあって良い。例えば、シンガポールの「マーライオン公園」のように。

冬の大通公園

大通公園は冬になると、札幌雪祭り期間以外は積雪で埋まっている。大通公園が冬眠しているのだ。もったいない。冬の雪にあこがれて訪れる海外の観光客は多い。なぜ、雪や氷の観光を創造しPRしないのか。大通公園は冬の観光の目玉に考えるべきだ。誰でも遊べる雪山のそり、竹スキー、スキー滑り台、アイススケート場、雪合戦会場などを設備すると面白い。

2. 都市構想の中での大通公園の将来像

(1)創成川を基点に東側方面への拡張

今年、創成川イーストがオープンし、二条市場の活性化が期待されている。そこで、大通公園を東側の1条橋近辺まで延長してはどうか。テレビ塔裏側の北電本社移転が不可欠になるが、ぜひ、札幌都市大計のために協力をお願いしたいところ。この東側はそれこそ今開催している、食やビール会場の催事会場公園として位置

づけてはどうか。そうすれば、「東方(かた)大通公園」かたや「西方の大通公園」としてその存在感が面白くなる。

(2)大通公園内、界隈にカフェテラスを

東西に長い大通公園だが、どこかのエリアにカフェとスイーツ、レストラン、道産品販売などの高層テラス(建物のデザインも有名になるような3階建てくらい)を造ってはどうか。家族や友人等と食事をしながら窓から公園内、近辺の風景や夜景を一望できるシーンを売りにするのも良いと思う。

(3)大通公園の将来の図面、レイアウトを

上記の構想は実現したくても数年では不可能、10年、20年の計画が必要だ。一度その構想図を作成し、費用を算出してはどうか。夢の構想かも知れないが市民や議会が意見を交わすのも良いことと思う。

時計台との融合を図れないか、シルバー層誘致に特殊ミニカーの運行を

3. 「大通公園イノベーション」に志を

これは大通公園を大改革するプランであるが、まず現状の大通公園の拡張だ。西1丁目から12丁目に広がる幅約65m、全長1.5キロ、面積約7万9千平方メートルの公園を12丁目から15丁目当たりまで延長すること、幅を両側とも約1車線分拡張出来ればベターだ。そしてシルバー社会を迎えて、公園内もしくは両側に下記に述べる特殊車両や福祉車両を走らせるのだ。市民に人生最後まで大通公園の空気、雰囲気を楽しんでもらえたら良い。

次に、今、北1条に鎮座している時計台との融合である。時計台を公園内に移設できれば最高だがスペースの関係で難しければ、文化の砦である中島公園内に移設し、大通公園と中島公園の観光ルートを敷設するのである。

4. 公園(人)と車と道路の関わり方

車社会は次世代自動車で進化している、ハイブリッド車や電気自動車など環境対応車、また、高齢者ニーズに対応できる予防安全技術を搭載する小回りが利いて運転しやすい近距離移動に最適な車両として、軽自動車規格より小さくミニカー(第1種原動機付き自転車)より大きい、2人乗り小型車を高齢者向け自動車としての社会実験がスタートした。「高齢者にやさしい自動車開発推進知事連合(会長=小川洋福岡県知事)」の取り組みだ。この構想を東西に長い距離の大通公園で実現すると面白い。高齢者を都心部に誘致し、高齢者消費を活性化する「シルバー・イノベーション」だ。新たな価値観や生活行動を持つシニア層を確実に市場開拓していくことが必要とされるからだ。

5. 大通公園の管理、整備のありかた

雪解け時期、春の公園整備に問題がある。市はその年の天候状態にもよるが毎年、4月中旬ころ、桜の季節時期に除雪、雪塊の除去作業を行っているが遅すぎる。市は通年観光を標榜しているのだから、札幌の顔の大通公園をもっと早く出来れば常時除雪して市民や観光客が楽しむ場所にしたい。もちろん、除雪や整備の経費はかかることになるが、ここは市の考え一つだ。

6. 札幌都心部は十字架ゾーンの大観光スポット

初めにも記述したが、大通公園は一番人気の観光スポットだが、大通公園近辺の再開発がめざましい。札幌駅前通は『パリ・シャンゼリゼ』を目指しているようだ。札幌駅から大通までをカフェや飲食街が並ぶ歩いて楽しい街並みに転換し、パリ・シャンゼリゼのようなおしゃれな通りを目指す報道されている。また、今年4月には大通地区～札幌駅周辺地区間の約680mを結ぶ地下通路(歩行空間)が開通した。さらに、近々、道庁東側にあるイチョウ並木の道も車の通らない広場(北3条広場)、遊歩道になるようだ。

札幌の都心部は、東西の大通公園を基軸に、薄野まで続く南北の札幌駅前通という十字架ゾーンを構成し、札幌の観光、経済を活性化させる夢のゾーンとなる。

大通公園100周年を基点に札幌の将来像をどう描くか楽しみである。